UD視点 3　関係づくり

お互いが支え合える学級づくりのためには、配慮を要する児童生徒だけでなく、すべての児童生徒に「困っていることを教師や友だちに伝えることができる」という安心感を持たせることが必要です。「ともに考えよう」、「ともに助け合おう」を合い言葉に、児童生徒同士の関係づくりを行っていきます。

問題行動のように見える児童生徒の言動への対応については、その背景を多面的に捉えることが求められます。そのためには、児童生徒のありのままの姿を肯定的に受け止め、気持ちに寄り添います。児童生徒に自分を見つめる機会をつくり、自己理解や他者理解を深められるようにします。児童生徒一人一人が、自他のよさや苦手なことを知った上でかかわり、友だちとのよりよい関係づくりができるように支援していきましょう。

児童生徒の困っている状況　UDの視点による支援や配慮のポイント

①　児童生徒の理解、児童生徒同士の関係の把握のために、観察・記録を大切にしている。

個々に問題を抱えている、友達関係のトラブルが多い、十分に力を発揮できないでいる

学級担任にとって、学級の特徴を客観的に捉えられない場合や、個人や学級の様々な情報を日常の指導に活かしきれていないと感じる場合があります。下の表のような方法で、児童生徒一人一人の情報を総合的に把握・分析し、学級全体の特徴や傾向を捉え直してみましょう。特に行動観察や聴き取りでは、日々の記録を取りながら継続的な取組みが大切です。

＜実態把握の主な内容　例＞

基本情報	学習面	生活面	その他
・家庭環境、生育歴、既往歴 ・行動観察（学習場面、生活場面） ・聴き取り（本人、保護者、他教員）	・全国標準学力検査（NRT） ・各教科の成績 ・各教科のノート ・作文、作品	・学級集団アセスメント（Q－U） ・生徒指導用検査 ・道徳性検査 ・進路適性検査	・特別な支援が必要な児童生徒の気づきのためのチェックリスト（山形県） ・心理検査

②　児童生徒同士が学級のことや友だちのことについて話し合える場をつくるなど、かかわり合える工夫をしている。

協調性がない、学級の意見がまとまらない、自分の考えや思いを発表できずにいる

学級のことや友だちのこと、学級の課題などについて、関心がない、学級全体の話し合いで解決したいと思うような雰囲気が育っていないなどの要因が考えられます。

そこで、お互いの考えや思いを丁寧に聴き合う場を通して、関心を持たせます。一人一人の違いを踏まえた上で協力し合うことが、学級全体の居心地のよさにつながります。

話し合いの前には、自分たちの生活をよりよくしたいという目的を持たせ、話し合いの方法などを確認しておきます。

話し合いの場面では様子を見守り、その後も児童生徒同士がしっかりとかかわり合えるように、教師自身がつなぎ役になることも大切です。

生徒と教師の話し合い（高等学校）

③ 時・場・相手などに応じたコミュニケーションの仕方について指導している。

友だちにどうかかわればよいかわからない

児童生徒を取りまく人間関係が希薄になってきていると言われる今、よりよい人間関係を築くための知識やスキルについて指導することが必要になってきています。
教師自身がモデルを示しながら、児童生徒のできている点を認め、学級に広げていきます。発達段階に応じて、計画的に、以下のような指導を進めてみましょう。

＜ソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ） 例＞

■内容 ・自己表現 ・感情のコントロール
・他者理解 ・集団参加

■方法 ・絵や文章による状況やスキルの理解
・ロールプレイなどによるリハーサル
・ゲームを通したグループ体験

9月18日 3種類の話し方

例 A先輩
「昨日貸したボールペン返してくれ。ないから不便でさあ。」
自分
（あれ？昨日返したはずだけど。先輩のかんちがいだけどな。）

①（攻撃的）
昨日返しましたよ。自分でどっかにやったんじゃないですか。
（余計な一言、関係悪化）

②（非主張的）
え？ あ、はい。ちょっと探してみます。
（時間が経ち、返したと言いにくくなってくる
後日、先輩から「だったら早く言えよ。」と言われる。）

③ 事実 ＋ 理由・気持ち ＋ 提案
（ ）＋（ ）＋（ ）

自己表現スキルの問題ワークシート（高等学校）

④ 児童生徒の問題やトラブルについて、本人又は保護者との相談を通し、その望ましい在り方を指導している。

友だちを傷つける言動が多い、反抗的な態度が見られる、指導しても問題が解決しない

該当する児童生徒が「～しようとしない」と捉えるのではなく、「～がまだ学習されていない」状態、あるいは「誤った対応を学習してしまっている」状態にあり、「できていない」、「やり方がわからない」と捉える視点が必要です。また、担任一人で問題を抱え、判断するのではなく、校内での検討を通して指導にあたることが大切です。

＜該当する児童生徒へのかかわり＞

児童生徒の自尊心を尊重し、共感的な立場で相談を進めながら、良好な人間関係をつくり保つための知識やスキル（③など）について、より具体的に教えていきます。
特に配慮を要する児童生徒の場合には、問題の状況や要因を丁寧に把握し、苦手な面を十分に受け止めた上で、長所を活用した解決方法などについて一緒に考えていきます。

＜保護者へのかかわり＞

現在の課題を明確にし、長期・短期の目標を設定して、学校や家庭での支援内容について共通理解を図ります。できている点やこれまで頑張ってきた経過をしっかりと認め、ともに児童生徒を支えていく意思を共有することが大切です。

⑤ 教科のねらいを達成するために、学級ごとの特性を把握して指導している。

教科担任

個々に問題を抱えている、友達関係のトラブルが多い、十分に力を発揮できないでいる

学級の個性や雰囲気は、児童生徒一人一人の特性や興味・関心、リーダーの性格、男女比や人間関係、担任の影響など、様々な要素の相互作用により育まれます。教科担任は、そうした学級の特性をよく把握した上での指導を心がけることが必要です。
年度当初、学級担任と話し合い、学力の傾向や人間関係の特徴などを十分に把握するようにします。その後も情報交換を活かして、学習形態やかかわり方などを工夫し、教科のねらいの達成に近づけていきましょう。

教科担任の打合せ（中学校）